



SU GA TA

No.13

特定非営利活動法人
小笠原流・小笠原教場

ごあいさつ

2020年は多くの方にとって大きな変化があった一年であったかと思っています。小笠原流の行事の多くが中止となり、門人の方々が自由に稽古が出来ない、体験会や講演会の開催にも制限があるという状況から当法人として、どのように活動すべきかを熟慮しました。多くの講演会や体験会、門人の方々の稽古が盛んに行われる小笠原教場の使用が制限されてしまったので、小笠原教場の整備や道具の修繕や作製に主軸をおくこととしました。始めて小笠原教場に來られた方にとって、強い印象を残せる設えや行事で使用する道具の美しさなど、自由に活動が出来るようになった時に備えた準備は常必要とされていることではありますが、時間的な制限があり対応が出来ていませんでした。おおよそ、この一年を使って道筋ができてきましたので、来期にはいよいよ小笠原教場の改修に入っていきたいと考えております。非常に大きな事業とはなりますが、完成しますと小笠原流の魅力を国内外の方々に強く発信できるものと考えております。困難な時だからこそ、様々な方々のお力添えをいただき乗り越えていきたいと考えております。会員の方々のみならず、ご縁をいただきました皆様と共に、小笠原流の歴史を築いてまいりたいと思いますので、変わらぬご支援いただきますようお願い申し上げます。



特定非営利活動法人

小笠原流・小笠原教場

理事

小笠原清基



1970年 鶴岡八幡宮流鏑馬 初場所写真

私の履歴書

松本 和正

— 出会い —

19歳の年の瀬、餅つきに誘われて初めて世田谷の教場の門をくぐった時から、気が付けば半世紀を超える月日が流れました。

高校時代、双子の兄は弓道部、私は剣道部で汗を流していました。その後大学に進んだものの、時は学生運動全盛期で大学は閉鎖。（コロナウィルス流行に苦しむ今の学生さんと同じです。）当時はオンライン講義などなく、キャンパス内の道場に通う事もできませんでした。暇を持て余していた私に、既に小笠原流入門していた兄が暮れの餅つきに誘ってくれたのです。これが小笠原流との最初の出会いです。

兄弟子から「歩射で射手が出来る様に上手になるまでは、時間が掛かるが、騎射は騎乗出来る様になれば、すぐに花形だよ」という甘い言葉を鵜呑みにして、騎射（馬の弓）の稽古を始めたのですが、当然そんな甘いものではありませんでした。

体力・判断力・瞬発力など必要とされる騎射の稽古は、まず礼法の基本（起居と作法）からでした。当時早



流鏑馬射手写真 津和野

弓の稽古をしたい私は、礼法の稽古を早々に切り上げて一階の弓道場に降りる事もしばしば、そんな時には先代の宗家清信先生に呼び戻される事も有りました。

馬上で安定した姿勢を保つために、腰と脚を造りあげる稽古は、なかなか大変なものでしたが、ありがたい事に、清信先生から「弓の手の内（握り方）は剣と同じだから、すぐに弓は引けるようになるだろう」とおっしゃって頂いた事を励みに若先生（現在の宗家清忠先生）のご指導は厳しいものでしたが、楽しくのめり込む

こととなりました。

すっかり騎射の魅力にはまり込んで稽古に励んだせいか、半年ほどで鎌倉鶴岡八幡宮流鏑馬で騎乗の機会を頂くこととなりました。初場所の良い馬に乗れということで「戸塚の馬」（名前が無い）というベテランの馬に乗り三つの的を皆中することができました。（新聞に写真が載り、忘れられない思い出の場所となりました。）

馬

騎乗の魅力は、20秒足らずの時間内に馬との一体感を感じながら弓を引き、走り切った時の充実感と爽快感だと私は思っています。

この半世紀に多くの個性ある馬達と出会い、触れ合いました。今でも思い出す御殿場から来た「高峰」・「清々銀河」・「サムティラー」、三浦乗馬クラブの「ワカメ」、日光乗馬クラブの「ヒロマサ」・「青海波」・「菱雲」・「武龍」・「梅笛」、上三川乗馬クラブの「ランディー」、那須千本松牧場の「ジョイナー」・「疾風」、京都競馬場の「ロングロイヤル」・「ケイラフティ」・「パッシングサイヤー」、阪神競馬場の「嶺山の星」等々、多くの馬達に馬術の基本や障害飛越や経験できない速度を教えてもらいました。

中でも「ケイラフティ」は、下鴨神社の流鏑馬射手として5年ほど皆中させて貰える愛馬としてのお付き合いになりました。初めて会ったのは葵祭りの送馬の時でしたが、快調に馬場を走った帰りに、ロデオ状態となり落馬してしまいました。折りしも一ヶ月前に結婚したばかりの妻の见ている目の前という、何とも記憶に残る出会いでした。（新婚さんは落馬するというジンクスを破れませんでした。）



フィンランドにて馬との信頼関係を築く著者

全国 神事奉納

小笠原流の流鏑馬神事は全国各地で奉納されています。北は北海道神宮から仙台護国神社・日光東照宮・笠間稻荷神社・鎌倉鶴岡八幡宮・平塚神社・京都下鴨神社・上賀茂神社・伊勢神宮・福井県多度大社・島根県津和野・宮崎神宮そして最南の鹿児島仙巖園等々と各神社を訪れることが出来たことも騎射の魅力の一つかも知れません。その土地々々で地元の方達と交流することも楽しみの一つです。

流鏑馬は海外でも執行されます。パリ・ロンドン・ハワイ・ヘルシンキ・モスクワでの行事にも参加させて頂きました。（現地の馬達とも仲良くなることができました。）

ロンドンの流鏑馬では、浩宮皇太子殿下（現在の天皇陛下）とチャールズ皇太子殿下のご臨席のもとで射手を務めさせて頂いたことは、貴重な思い出となっています。（国内とはまた違って臨む力も変わるのかもしれませんが、海外での流鏑馬は的中率が高かったようです。）

1984 年下鴨神社騎乗



1984 年下鴨神社射手



日光東照宮平騎射



2018 年ロシア・モスクワ競馬場



下鴨神社 一の射手



明治神宮射場始

— 歩 射 —

騎射の思い出がたくさんありますが、歩射の儀式にも多数参加させて頂き、全国各地を訪れる機会も増しました。騎射の行事での南端訪問記録を越えて沖縄護国神社での神事にも参加させて頂きました。

勤め先の会社でも弓道部に所属して、実業団のリーグ戦や全日本大会に参加したり、東京都の弓道連盟では小笠原支部のメンバーとして支部対抗戦で準優勝したこともあります。また東京都の地区対抗戦では選手に選ばれ、第二地区の優勝に貢献できました。

弓道連盟では東京都弓道錬士会の事務局から会長まで経験させて頂き、コロナ禍の行事調整の難しさも勉強することができました。

— 感 謝 —

長く弓馬術と関わり続けることが出来たのは小笠原流ご宗家三代（清信先生・清忠先生・清基先生）のご指導は本より、優れた兄弟子の方々、切磋琢磨し合った同輩の仲間のお蔭と思っています。

これからも、私の人生に於いて無くてはならない弓馬術の世界、きれいに弓を引くという目的で稽古は続けて行こうと思っています。そして、私の経験がこれからの門人の方々の手助けに少しでもなるのであれば、惜しみなく伝えて行きたいと思っていますし、馬達との触れ合いも続けたいと思っています。

出会った多くの方や馬達に心から感謝しています。

最後に19歳の自分を餅つきに誘って、長年一緒に稽古をしてくれた兄と、新婚当初の落馬から始まり、幾度かのケガや入院にも拘わらず温かく???応援してくれた妻に感謝したいと思います。

これからも頑張ります。

私と小笠原流

森山 雅智

私は東京生まれ、写真家を生業にしています。写真家としては独立してから15年、アシスタント時代を含めたら約20年になります。仕事は東京を拠点にしながら、京都、奈良を中心に雑誌や書籍に使う写真の撮影、特に日本の伝統文化に関わる撮影を積極的に行っています。

小笠原流に関わる仕事では、書籍「小笠原流 流鏑馬」の掲載写真の約半分、「BUDO Japanese Martial Arts」は全ての写真、そして「Ogasawara-ryu Arts」や「Dignity in Silence」の表紙を撮影させていただきました。

— 小笠原流との出会い

私と小笠原流とのご縁は、2012年に雑誌 婦人画報の企画で、鹿児島 仙巖園で流鏑馬を撮影させていただいたのが始まりです。俳優の青木宗孝さんが礼法を学び、最終的に仙巖園で流鏑馬奉納に立ち会うという企画のものです。

最初に教場に伺ったときのことは、良く覚えています。青木さんと私を、御宗家と奥様が迎えてくださいました。その日はとても寒くて、教場の二階に通されたのですが、部屋の中でも吐く息が白いほどでした。あまりにもガタガタしている私たちを見かねてか、御宗家は腹式呼吸をすれば温かくなるとアドバイスをくださいました。まさかそんなと思いました。目の前にいらつしやる御宗家は、確かに寒そうではなくどつしりとしていらつしやる。その日の御宗家は表情もあまりお変えにならなくて、寒さも手伝つてのことか、とても怖いという印象を受けました。いまでは最も優しいお方と承知しておりますが、武士の頂

2016年 鶴岡八幡宮 BUDO Japanese Martial Arts より





小笠原流と出会った「婦人画報」
は表紙の撮影も多い
© ハースト婦人画報社

点に立たれる方から、今までに感じたことのない凄みの様な迫力を受けたことを覚えています。

その後、仙巖園で初めて若先生にお目にかかりました。そのときの若先生は髪が刈りあがり、眉もきりつとしていて、目つきもすごく鋭くて。男前だな、こんな感じで馬に乗り走ってきたら絵になるな、と思いました。

当時の私は写真家として独立して5～6年で、伝統文化よりファッションの仕事が多かったころでした。その後、婦人画報に掲載された

そのときの流鏑馬の写真を若先生がご覧になって、流鏑馬の本を作りたいと、お話をくださいました。その写真は今見ると、馬の注意を自分に引いてしまった無知な問題写真ではあったのですが、若先生はそこから何かを感じとってくださいたのだと思います。

私を変えた仕事

それからは日本各地の流鏑馬へ撮影に行かせていただくことになりました。もともと小笠原流について勉強したいと思い、撮影へ行くたびに発見・訂正・研究を積み重ねていきました。

日本で一番古い馬場が残っている津和野へ行ったことです。それまで若先生とはご挨拶くらいであまり会話を交わしたことがなかったのですが、「ここはちよつと他とはちがうので、われわれと同じ格好をしてください」と、若先生から話しかけてくださいました。

その頃の私は白いシャツに黒いパンツ、小笠原流ジャンパーを着て撮影していたのですが、門人の方が総

がかりで流鏑馬衣装を着せてくださり、少々殿様になった気分になりました。射籠手もはめて、若先生は脇差まで差ししてくださいとうしましたが、カメラがぶつかって脇差に傷をつけてしまったはいけないと思います、それは遠慮させていただきます。気がつけば若先生も御宗家も流鏑馬衣装を着た私を笑顔で見てくださいっていて、その日初めて皆様に受け入れていただいた感じがしました。

流鏑馬衣装を着ての撮影は、使い慣れたカメラを動かすのさえ難しく、こんな動きにくい格好で、馬に乗って、両手を離して弓を射ることがどれだけ凄いか実感しました。また同時にカッコいい被写体から、この方々はただ者ではないなという見方に変わりました。

小笠原流の撮影では、瞬間的なことが起きるし、神社が違う、馬場の長さが変わる、時間の関係で神事の流れが変わるなど、柔軟に、そしてすぐに行動しなくてはいいことが多くあります。それらに対応すべく撮影を重ねるたびに、機



津和野にて 一番思い入れのある一枚

材を改善していききました。

流鏑馬の写真はただ撮るだけであれば、レンズは広角から望遠までフルカバーできるようなもの一本で良いのですが、それでは美しい絵が撮れません。馬場ではレンズを交換すると砂が入るなど危険が伴うため交換しない方が良いので、カメラは体の左右両サイドに一台ずつと肩に一台の計三台なければダメだとか、普段の撮影では使わない流鏑馬撮影専用の超望遠レンズも購入し、そのうえで機材は必要なものだけに削り調整していききました。気が付けば撮影の時に着る道着も袴は二枚、上は三枚くらい、足袋も何足もそろえていました。

「思い入れのある一枚」

私が小笠原流で撮影した写真の中で一番思い入れのあるものは、津和野で撮影した馬に乗った若先生の後姿と桜の写真（上）です。これを撮るまでは動きのある「勇ましい、強い、格好良い」という写真が良いと思っていましたが、この日、流

鏑馬を終えて馬に乗り桜のほうへ静かに戻っていかれる若先生の後ろ姿を拝見したときに、感動して思わずシャッターを切りました。

本当に美しいのは静の部分なのかもしれない、本質的なものが撮れるようにと真剣に向き合おうと思ったのはこの瞬間でした。

写真家として満足がいき、また技術的に誰からもなにも言われない写真（ベストショット）は、正直に言うともまだ撮れていません。私の中ではベストショットは作られたものではなくて、偶然の中から生まれる、いろいろなもののピークが重なったその瞬間に撮れるものだと思います。しかしあえてベストショットを選ばず、一番気に入っているのは写真集 BUDO で使った写真（6ページ）です。

思い入れの一枚も、ベストショットも若先生になってしまいましたが、若先生の馬上の姿はとても美しく、写真家を引きつける要素がそこに集約されていると思います。

小笠原流から学んだこと

私は小笠原流の合理的であり、そぎ落とした中に美しさがあるという考えにとっても共感しています。写す絵自体もそうですが、機材なども、どれだけそぎ落として無駄をなくすかということをいつも考えています。

それと同時に礼を大事にしているところがとても興味深いです。例えば西洋では馬に乗る前に礼はしませんが、小笠原流の方々は馬に乗る前に礼をします。急いでいても何を



2016年12月 BUDO 撮影現場

していても、礼法を外してはいけません。一連の動作の中で目的と違うことを入れることは無駄なこと、西洋的な考えでは省くところを、小笠原流では一番大事にしている。色々なことが合理的で便利になり薄くなっている現代に、合理的ではないとさえ思えることを大事にしている。そのようなところが自分の生活の中でも重なるように感じることがあります。被写体はいまシャッターを切らないといなくなってしまう瞬間かもしれないけれど、そこに礼を挿めるだろうか、それがシャッターに載せる気持ちが変わってくるころだと思っています。

時代の変化に合わせて

世界が大きく変化している現在私は仕事としての写真について考えるときだと思っています。今までのように経済のために仕事をするのではなく、純粋に「撮る」という行為を楽しみたいくなっています。最近では動画の仕事が増えてきて、作家としてさらに色々な表現にチャレンジしていきたいと考えています。



2019年小倉城 今の流鎧馬撮影スタイル

今のように先が見えないときだからこそ、850年続いている小笠原流から学ばせていただくことがたくさんあると思います。武道、その精神、小笠原流については日本だけでなく、世界の人も興味をもっています。小笠原流がより広ひろがり、世の中がより良い方向へ向かうよう願っております。

私は清真様が流鎧馬デビューするまでは頑張ってカメラをまわしていたと考えています。

◆寄稿者プロフィール

株式会社ラジン 代表 森山雅智

1976年東京都生まれ。
写真家。

東京を拠点にしながら、京都、奈良などに居住し日本の伝統文化に関わる撮影を積極的に行う。
写真集「BUDO」(日興美術株式会社出版局)は、米インターナショナルブックアワード、多文化ノンフィクション部門最優秀賞受賞。
www.ra-jin.com

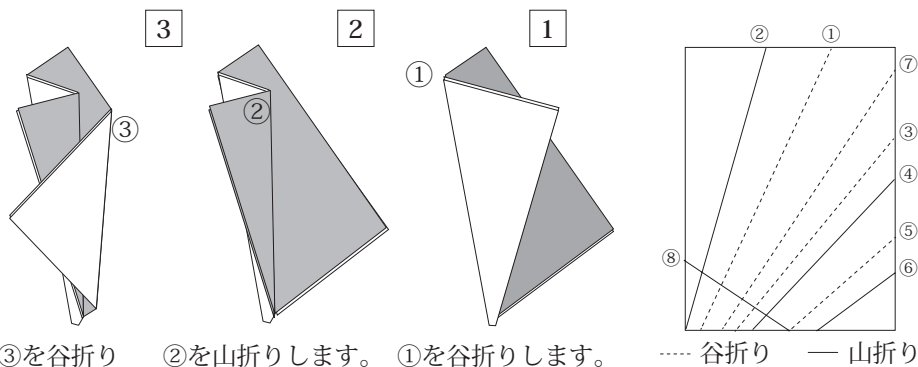
子どもの礼法教室

その6 折り形

紙で何かを包んでお渡しするというのは一般によく行われることだと思います。しかしながら、最近では包装紙に代表されるような画一的な包み方をし、紙の絵柄で変化を持たせることが主流になっているかと思っています。折り形といえは『折り紙』であり包むためのものということよりも飾るものという観点が強くなっているように思います。紙は貴重なものであり、また印刷技術も無かつたために何か物を包む際には折り形で工夫をする必要があったのかと思います。小笠原家には数百種類の折り形が伝わっているとされています。例えば、記載された色紙を包む際の折り形、未記載の色紙を包む際の折り形、胡椒を入れる際の折り形、弓を包む際の折り形などです。小笠原家以外の家にもそれぞれ別の折り形があったようですが、今も伝わっているかはわかりません。今回は、小笠原家の折り形について記載したいと思っています。

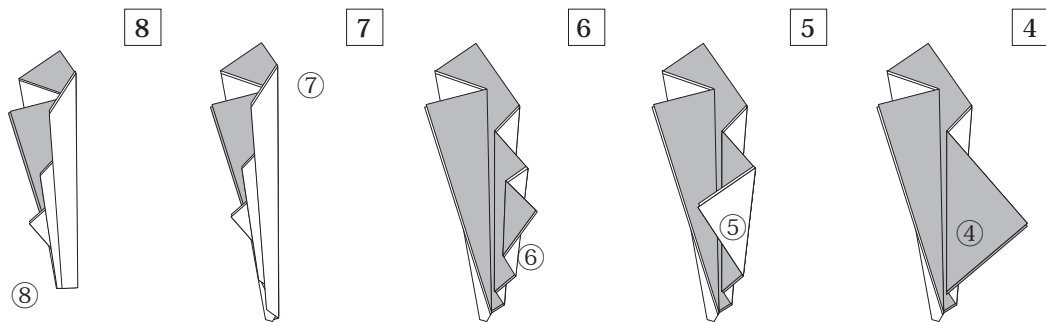
何かを包む際、紙は二重にして使います。弔事の際には一枚にします。紙で包んだ後に開いてしまわないように水引で留めます。つまり水引は紙を留めるものですので解けないように結ぶことが大切です。水引で装飾をすることをよく目にします

草花包 くさばなつつみ



③を谷折り ②を山折りします。①を谷折りします。

---- 谷折り — 山折り



⑧を山折りして水引を結びます。

③から⑥までをたたんだ状態で⑦を谷折りします。

⑥を山折りと屏風状に折ります。

⑤を谷折り

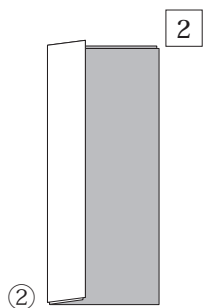
④を山折り



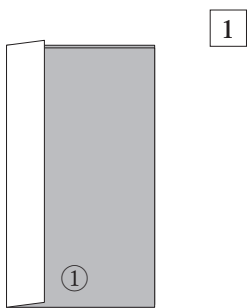
が小笠原家では水引での装飾はしてはいません。老いの波といって水引の端を丸める場合がありますが、これは海老の髭を模しており長寿を祈念しています。木花包みと草花包みの折り形を記載しますので、是非試してみてください。

木花包

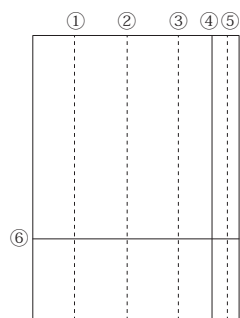
きばな
つつみ



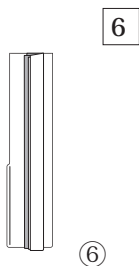
②を同様に右に谷折りします。



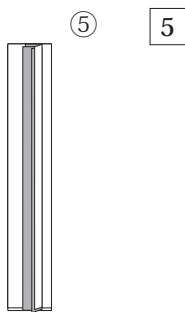
左端を①で右に谷折りします。



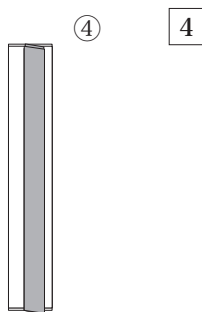
----- 谷折り — 山折り



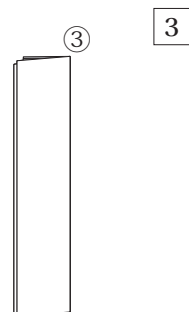
⑥を山折りして水引を結びます。



⑤を左に谷折りします。



④を右に仕上げるの3分の1のところを山折り、



右端を③で左に谷折りします。

理事長のつぶやき

小笠原教場改修について

当法人理事長 小笠原 清基



教場再建披露礼法 酒寄せつ氏薙刀披露

小 笠原流は鎌倉時代より歴代の将軍家に仕えてきました。

明治になり将軍制度が無くなりましたと小笠原家は流儀の継承のために徳川家の許しを得て明治12年に東京神田に小笠原教場を開設します。お留流であった小笠原家の式法が一般に門戸を広げるという大きな決断をしたのが28代清務です。清務は一般に門戸を広げたものの、流儀を教えることを生計の糧にしているという家訓を定めまします。流儀を教えることで得たお金は流儀のために使うということです。さらに、『道場』ではなく『教場』という文言にすることで稽古を通して『道』を見出していくという意を込めました。『道』というのは自分で歩むものであり、歩み方を学ぶ、身に着けることが稽古であるということです。

大

正12年の関東大震災により教場は焼失しました。29代

清明は崩れた土蔵から伝来の書籍系図と一部の注釈書を身をもって取り出し避難をしましたが、道具



上棟祭での屋越の幕目



床柱、脇床板などの収納庫前で 長谷氏、神宮司庁 岡田氏



日光東照宮御神木（上・下）



類はこの時に焼失してしまいました。昭和9年に小笠原教場は再建されましたが、昭和20年の東京大空襲において再び焼失してしまいました。この時は事前に藤沢に疎開していたため、伝来の書籍等は焼失を免れることができました。

昭和36年30代清信により世田谷区南烏山に土地を求め自宅を移転させ、礼法の稽古、野立ちではありますが、弓術、弓馬術の稽古が

できるようになりました。昭和40年には伊勢神宮、日光東照宮より御神木を拝領し、多くの方々のご協力により現在の教場が再建されました。多くの門人の方が稽古をし様々な行事で流儀の継承をしていく拠点となっておりました。しかしながら、時代の流れと共に弓道場での安全設備の無さ、家屋の老朽化などにより25年ほど前から小笠原教場の使用が困難となつてまい

りました。鶴岡八幡宮の研修道場や大宮八幡宮の弓道場を使用させて頂きながら稽古ができる環境を維持してまいりました。本号の『私の履歴書』で記載をいただいております松本和正さんは鶴岡八幡宮の研修道場、大宮八幡宮の弓道場の使用にあたり大きく貢献をされた方のお一人です。



教場の天井裏鬼門に向けた弓と鎗矢



田中喜芳神宮少宮司の書



地鎮祭



上棟祭での玉串奉典

1年前に私の結婚を機に小笠原教場の再開が始まりました。費用のかかる事でもあります。土間の作製、そして矢道の安全設備の建設と工事をする年を変えながら進めてまいりました。内装や外の植物などの植え替えなどは門人の方々にご協力をいただきよりよいかたちへと変えていきました。そして、平成27年には稽古が再開できるまでに改修を進めることができました。小笠原教場が再開すると、講演会や体験会の依頼も多くなり多

様な使い方が求められるようになってきました。さらには、諸外国の方々もこれらという事で昭和39年に建設した際とは異なる状況となつてきています。小笠原教場を再開したとはいえ、最低限のことだけで、諸道具の管理や作製、多様な事務対応ということまでではできません。この部分の改修には小笠原教場の一時的な閉鎖ならびに多くの費用がかかります。COVID-19による影響で小笠原教場の稼働率が著しく低下をしています。時期としては、今が抜



再開時の道場から玄関を望む

本的な改修の機会であると考えています。そのため、COVID-19の混乱が収束するまでの間になんとか抜本的な改修を終わらせ、自由な往来ができるようになった時には多くの方々にとって使用しやすい稽古場であり、諸道具の管理が適切に行われる設備にしておきたいと考えております。伊勢神宮、日光東照宮からいただきました建設した部分には触れずに改修をするべく建築士の方と相談をしているところで

す。少なくとも50年は使用上の問題が出ないような内容にしていきたいとは思っております。様々な環境変化がありますが、小笠原流として何を伝えたいか、何を知らせたいか、何を大切にしているのかを軸に内容を考えていきたいと思っています。簡単な事業ではありませんが、多くの方々のご協力をいただきながら実現をさせていきたいと考えております。



教場披露での流鎧馬



弓術教場における参列者



礼法稽古場において三十世 小笠原清信

2020年度の 活動報告

講座について

子ども流鏑馬教室

教場にて、子ども流鏑馬教室を行いました。例年は春に行っておりますがCOVID-19のためには本年は秋に開催することとなりました。6回講座で稽古着の着方や木馬での稽古、弓の引き方などを行いました。この事業は文化庁の助成事業として行いました。

弓道教室

埼玉県北本市にあります小山弓具併設の弓道場にて、弓道教室を行いました。毎年、弓道教室を出られた方から門人になれる方もおられ、小笠原流の弓術の普及に貢献している教室です。また、同施設では外国人の方を対象とした弓道教室も開催しています。

礼法教室

千代田区にあります区の施設をお借りし、水曜日の夜に礼法教室を行っております。講師には小笠原流の礼法を稽古されている門人の方々にお願いしております。週末や平日の昼間の稽古では時間が合わない方々に小笠原流の稽古をしていただける場として大変有用な機会を提供出来ていると考えております。COVID-19のために開催できない期間もありましたが、継続して礼法教室を行っています。

女性向け礼法講座

京都駅近くにありますキャンパスプラザにて女性向けの礼法講座を開催しております。平日夜、京都駅近くということもあり、多くの方にご参加いただいています。

広報活動について

海外の方々に認知をしていただくためにウェブサイトを更新しました。

オンライン講座のための整備をしました。

その他

小笠原教場に併設する敷地に道具の保管庫を建設しました。

矢道の整備を行いました。

諸道具の作製を行いました。

道具の修繕に関わる環境整備をしました。

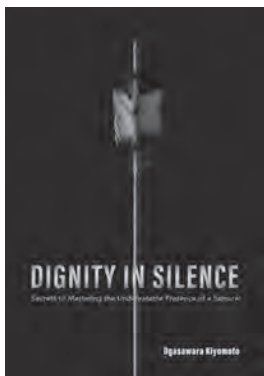
書籍紹介



生き抜くための小笠原流礼法
著者 小笠原清基 1,540 円 (税込)



形姿
型に心が伴うことで形となり、
気高き武士の姿となる —
著者 小笠原清基 2,090 円 (税込)



Dignity in Silence: Secrets to Mastering
the Undefeatable Presence of a Samurai
著者 小笠原清基 4,180 円 (税込)



会員制度と特典のご案内

NPO法人 小笠原流・小笠原教場では、新たに特別賛助会員を設置いたしました。
会員になっていただける方は下記事務局までお問い合わせください。

	個人会員	法人会員	特別賛助会員
入会金	5千円	5千円	5千円
会費ならびに寄付金	一口以上 (一口1万円)	三口以上 (一口1万円)	一口以上 (一口10万円)

※特別賛助会員は総会での議決権が付与されませんことをご承知おきください。

	個人会員	法人会員	特別賛助会員
門人向け会報「糾方」(年二回発行)	1部	3部	20部
会報「姿」(年一回発行)	1部	3部	20部
行事拝観	2名まで	5名まで	20名まで
掲示板の閲覧	○	○	○
冊子への社名記載	—	—	○
教場での社名記載	—	—	○
税優遇	—	—	—

* 社内報などに掲載していただくことが可能です。

ご寄付のお願い

NPO法人 小笠原流・小笠原教場では、小笠原流の伝統文化の保存と育成を目的としてご寄付をお願いしております。寄付いただける方は下記事務局までお問い合わせください。

寄付金額:1回3千円以上

寄付いただいた方には、年二回発行される会報誌「糾方」とご希望の方にはメールマガジンを送らせていただきます。

税控除について

2017年に認定NPO法人となりましたので、寄付頂いた後に確定申告されると、寄付金控除を受けることができ、最大約半額が戻ってきます。

※詳しくは最寄の税務署にお問い合わせください。

NPO 法人 小笠原流・小笠原教場

<http://www.ogasawara-ryu.gr.jp>

e-mail npo@ogasawara-ryu.gr.jp

令和3年6月1日 特定非営利活動法人 小笠原流・小笠原教場 発行

編集・発行人 小笠原清基

〒251-0037 神奈川県藤沢市鵠沼海岸 2-17-4 TEL 0466-34-4089 FAX 0466-34-4102

©Ogasawara-ryū Ogasawara-school 2021 Printed in Japan



特定非営利活動法人
小笠原流・小笠原教場